月刊 twitter 文芸部 1 月号特集に寄せて

文責:イコ

【はじめに】

1月号の10篇は、各作品に類似を見出しづらい、部員の個性のあらわれたものが揃った。 それぞれに目指すところがあり、思うことがあり、追求してきた結果の意欲作であること がうかがえた。それだけでも編集長として、今回の企画は半ば成功したと思う。

これが半ば、で終わらないようにするためには、この合評会で部員各位がいかに「作者に刺激を与えるか」を考えていくべきだろうと思う。努力した作家に対して、部は、十分以上のフィードバックを与えなければならないと思う。twitter 文芸部をさらに活発な集まりにする正の連鎖への一歩目だ。

読者はここにあげられた作品に対し、自分の文学観に沿わぬとして、思う存分切って捨てよろしかろう。ネットの海に漂うアマチュアの作品は有象無象とすべて並列。切って捨てられて当たり前。自分を鍛えよう、向上しようという志があるならば、褒め言葉ばかり探して他の言葉に耳を塞ぐのは、あなたのためにならない。あなたを狭い井戸の中で腐らせるだけである。(狭い井戸の中で腐りたいのであれば、初めに述べておきなさい)

狭い井戸の中で腐らない作家の作品というのは、すなわち、どのような方向を示していたとしても、得体のしれない説得力を秘めるものである。すぐれた文芸作品はジャンルを軽々と越境する。自省をこめて言うが、今時「純文学」などという死滅した言葉(ただの言葉)に依りかかっていてはいけない。今回は、自分の読むジャンルにこだわらず、「説得力」の有無によって評価してみようと思う。

もう一つ新人に求めたいものがある。読み手の呼吸をかき乱すような作品を読ませてほ しい。体内に流しこまれる作者の血の一滴一滴がもたらす異物感、アレルギー反応、激烈 なショックこそ、新人作家の作品に最も存在してほしい要素であり、最も欠けている要素 でもある。作家として何十年も活動してきた人に対して、知識や技術において、あなたが リードすることはまずできない。玄人に秀でることができるのは、素人の血のみといって もよいだろう。

【スイッチ/甲斐寛樹】

息を吐いたまま読み進めることができ、吐きっぱなしで最後までたどり着くことのできる作品であるが、哲学的な問いへと移行するいくつかの要素が、この作品を軽視できないものにしている。「エンタメ的な筋のなかに、人間をしのばせるようなものが好きだ」と作者は言っていたように思うが、まさにそういう狙いのものになっている。だが説明過剰で

ありながら、主人公の自己省察は駆け足で一貫せず、最後などは手を抜いているのかと思うような文章である。スイッチはゆっくり切り替わるのか、それとも一瞬で白黒はっきり分けるのか。読者はむろん後者をイメージするだろう。言葉への執念が足りないのだ。思いつきで書いたものに血は宿らない。呼吸は乱れない。説得力はない。

【リセット/しろくま】

SF映画を見れば、冷凍睡眠などはよくあるハナシだが、この作品のように、一年だけ眠ることができる「リセット」という制度は、非常に地味なだけに、妙な説得力をもっている。まゆちゃんを亡くした親戚の人々は誰もリセットしておらず、「僕」だけがリセットしている、というのもよい。「僕」はその選択一つによって、周囲にとって自分が異物であると感じる人間なのだ。ところが誰も働く僕を「異物」であるとは見ない。この淡々と流れる水のような文章は、その異物感、ストレスを和らげる、静かな正のエネルギーを感じさせる。負のエネルギーに満ちた作家は多いが、正のエネルギーを描く作家は少ない。ただし、この作家の文章は(他の作品においても)、あまりに読者に刺激を与えないのだ。「なんだか地味」で終わらない作品であってほしい。

【明け方の焔/6】

これが文芸誌に載っていても、何ら遜色ない。この先しっかりと推敲されれば、楽しんで読むこともできる。辻原登にはこのような文体で書かれた作品があるし、血の因縁は田中慎弥によって書かれている。村上春樹には、焚火に魅せられた男を描く作品がある。かようにこの作品は、あまりに文学的な意匠の、日本文学なのだ。作者の文学への愛情、そして何より読書経験がよくうかがえる作品である。今回の短編競作では数少ない、読者の読むスピードを調節した作品でもある。そこまで言うならこれは説得力があるか。血はあるか。否、現時点では、そこまでのものはうかがえない。「火の神」の神話と、幻想的な焚火を絡めて、イザナミと妻、父と子が重ねられているように見えるが、それはハッキリ言ってやりすぎだ。なぜ少年が火の神の神話にこだわるのかが見えない。作者の仕掛けであることが明白すぎるのだ。文学的な landscape への愛情はあっても、作者自身にしか描かれえない景色が、一つとしてない。読書経験に依りかかっても、自分だけの小説は、モノにはできない。

【いざ起て戦人よ/小野寺】

四人の中心人物がバラバラだったところから始まり、最後にまとまって終わる。この後 卒業していく、あるいはやめていくなどして、男女は再びバラバラになるだろう。一度き りしか経験できない、後戻りのきかない人生だからこそ、そのまとまった一瞬が、青春を満足させる。そのような狙いをもった話として読んだのだが、彼らの紐帯は、あまりにも散漫に描かれており、敏雄が満足するのは、ただの勘違いであるように思われてならない。不器用な人間たちの行動の裏に、認め合う様子などがほしかった。この先に離反があるからこそ、不器用を通り越して、ただ断絶したコミュニケーションの連なりが走っていくだけでは、読者に充実した読後感を残すことはできない。初めから断絶を示した、ペシミスティックな話なのであれば、今度はそのような意味での虚しいまとまりを強調すべきである。(いくらでも可能だ) ぎこちない文章に作者の血は入っているが、説得力はない。

【目覚め/緑川】

この作品を、単に生者と死者の交歓の描かれる静かな恐怖作品として読みとることもできるが、その奥に「何かある」と思わせるところが、すぐれたところである。彼は一体何に「目覚め」たのか? 単に幽霊が見えるようになったというだけでは許されない、奥に広がる解釈の余地に、刺激されずにおかない。労働によって精神の摩耗していた主人公の「自我」の目覚めととらえて、非常に楽しく読ませてもらった。(「君」というように自分の存在を語るのは、自分を客観視できるようになった「私」だということ)この作者の作品には、作者自身の「自我」の影響がない。それが話を「つくりもの」にしているきらいはあるが、少なくとも、独りよがりの作品ではない。この作品をさらに説得力のあるものにしたければ、目線の描写を徹底すべきだ。誰が誰を見ているのか。どのように見ているのか。それが作者自身にしかできない表現で語られれば、この作品はさらに濃密になる。

【劣情に惑う剣/常磐誠】

頭の中でイメージがアニメーションに変換される唯一の作品である。だからといって文学たり得ないとは思わない。この作品には、ハンデキャップを背負ったがゆえに凛としていられる悠という存在が出てくるが、このキャラクターの造形が非常に一貫しており、芯の強いものを感じさせる。(悠は、後半、田中香織の側にも立つことができる有能なキャラクターだ。) 悠がそのような強さを身につけることができた理由も、描かれてはいないが、言外で想像することができる。幼い主人公の、幼さゆえの葛藤が、よく描かれた作品であって、良質の短編アニメーションを見ている気にさせられた。この方向に進むのであれば、文章力・語彙力は必ずしも重要ではないが、作者自身の幼さが垣間見える表現が散見することにはいささか閉口した。結末の付け方は安易であり、「優しさ」で片づけるのではなく、もっと挑戦してほしい。またタイトルが、せっかくの作品を殺している。主人公の感情が「劣情」の一言ですむなら、原稿用紙など、すべて破り捨ててしまえばいい。

【オレンジの巣/あんな】

立体的な作品である。同一平面上、同一時間軸上に描かれる作品は数あれど、このようにひとつの細胞から宇宙の存在まで、そして一人の女からすべての女まで、曖昧な輪郭のなかに描ききる力は並のものではない。現代詩をよく読むという作者の、詩的感興を存分に吸収した上での、断片的な言葉の連なり、読者を立ち止まらせたい、こだわりのある「表現」の言葉と、ただ流れてもよい「伝達」の言葉のバランスが巧みである。スラッシュで文を切り分けるやり口は、堕胎や、内側、外側といったイメージを想起させ、たしかに得体のしれない説得力を秘めている。ただ作者の描き方・自我の表明の仕方が、川上未映子の書く文章に、類似しすぎてはいないか。思えば川上未映子はキャッチコピーの天才だ。一言で相手を言葉の渦のなかにからめとる。この作品に、そのようなキャッチコピーはあるだろうか? 作者にしか考えつかない殺人的なキャッチコピーによって、エピゴーネンに陥ることを回避してもらいたい。

【親子の敗走/だいぽむ】

中央集権が行われて久しい文学の世界では、地方はイロモノとしてのみ描かれる。都会的感性をもった新人類たちがうろつく高く狭い現場の周囲に、しかしこのような旧弊的な価値観をもった家族の貧乏は、確実に存在する。作者は低く広い土地にまだなお残る生活の実態を、その土地の言葉をもって語ることのできる存在である。この作者が犯した最大の失敗は、緊張感あふれる「現代劇」であるべきところを、中途半端に古めかしい文体に変えてしまったことで、時代錯誤の印象を読者に与えてしまうところだ。「親子の敗走」は、今もなおある。「旧時代のものですよ」と作者が笑いまじりに語ってはいけない。敗走する親子の滑稽、悲嘆といったものがたちまち薄まってしまうのだ。それでいて最後の「貧乏はつまらん」という父親の言葉は、作者の肉声のようでもある。その肉声を書いた途端に、「プロレタリア文学」的なものに変貌してしまうとは考えなかったか。プロレタリア文学が旧時代の「ブーム」であったことを思うと、ブームの去った今では、より、時代錯誤にとらえられてしまうのである。描くなら、芯から真面目に描き、その上でにじみ出てくるユーモアに、読者を没入させるべきである。

【出来そこないのマリア/る】

カッコ悪いことをカッコよさげに語っているこの男は、「出来そこないのマリア」がどんなものかなんてことも、本当はまったく分かっていない。「俺の間違いだった」って分かったらしい彼は、実は何が間違っているのか、まったく気にしていないはずである。他者に対する想像力の乏しい人間が、自我を磨き上げて作った文章と感じた。作者の文章、詩に

は、「俺」以外の他者がいない。作者はどこまでも自分を愛している。ただしその感性、表現を徹底しようとするスタイルは、真似しようとしてもなかなかできることではない。オナニーをある程度見られるオナニーに仕上げる芸当には感服させられるのだが、一度自分の精神から離れて、信仰の対象でない、現実の女を描いてほしいものだと思うのだ。自我に満ちたひとりの男が現実の錘によって相対化されるとき、小説は、ぐんと大きくなり、切迫感を増すのだ。